

## 批評及び紹介

### スタイン氏古代の和闐(其二)

#### 第二編 和闐の歴史

#### 第一節 建國の傳説

和闐建國の傳説には『西域記』、『慈恩傳』、西藏語の

『于闐史』の三種あり。『西域記』<sup>卷第</sup>二瞿薩旦那國の條

に依れば、昔印度の阿育王は太子をして咀叉始羅國

(Taksasila)の太守たらしめしが、阿育王の妃は事に

よみて太子を恨み、敕書を偽造して太子の罪を問ひ

命じて兩眼を抉除せしむ。阿育王之を知り怒りて事

に當りし宰臣を國外に逐放す、宰臣は部下を率ゐて

印度を出て、雪山の北に赴き、未開の地に住し後代

に于闐となるべ地方を占有して其西部にあり、同志

の人民は豪族を推して王たらしめたり。是時に當り

東國帝王の一王子も亦罪を以て流され徙りて東部の地を領し、部下の爲に推されて王となる。後東西の二王互に隣君あるを知るに及んで遂に東西二軍の戰爭を生じ、西軍敗れて國王陣歿したれば東王遂に東西二國を統一したり。兩國の統一既に成るや國王は一仙人の教によりて都を于闐の地に建てたりといへり。

この傳説を見るに、(一)印度移民が來住せし時代を阿育王の世とす、是れ即ち佛教が外國に傳播せし時代なれば、後世子闐に佛教の傳はりし後に於て形成せられしもの、如し、(二)印度及び東國の二族が各々部下と共に來り、戰爭の結果東國の部族勝利を得たりとするは支那及び東隣諸國との交通開けたる後に成りしものか。西藏の『于闐史』には國王が阿育王の裔なりとし、『慈恩傳』には阿育王の太子自ら

于闐に來りて王となりたりとし、『西域記』にも國祖の初王は子なく毗沙門天に祈りて一子を得たりとするが故に、何れも北印度の人民が移住すると共に印度の古傳説をも于闐に輸入せし史實を指示するものなり。

## 第二節 唐以前の于闐

漢代より隋代に至るまでの于闐を見るに、『漢書』には于闐の首都を西城とし、人口九千三百、兵士二千四百とすれども、『後漢書』には人口八萬三千、兵士三萬とするが故に西曆第一第二世紀に人口頗る増殖せる結果を示せり。于闐は久しく莎車と争ひしが遂に之を滅ぼし、其勢力は一時ヤルカンド附近に及び、西曆七十三年班超西域に往きて鎮守たるに及び于闐も亦遂に之に服従するに至れり。順帝の世に於て于闐は扞彌を并合し、三國時代には戎廬・疏勒の地をも領し國威甚だ揚る。晋代には西域に於ける支

那の勢力衰へたれども尙ほ幾分の交渉を有し、法顯は西曆約四百年を以て于闐に着し、この國の政教を詳述して其隆盛を説けり。北魏の時代（第四世紀より第六世紀に至る）には于闐の領域は方四千里に互り領内には大小數十の城市を有し、首府は方八九里に過ぎず。第五世紀の中葉に當り慕利延の侵す所となり、後又た蠕々の攻撃を受く、『梁書』には于闐の佛法盛大にして、王宮の壁畫は美術の精華を集めたりと云へり、宋雲が西曆五百十九年于闐に至りし記事には領城東西三千里、白匈奴の勢力の下に立つ。隋代（西曆第六世紀より第七世紀に亘る）には于闐の事情も前朝も異らず、『隋書』の記事も『北史』の示す所に異なることなし。

## 第三節 唐代の于闐

唐の太宗より徳宗に至るまでの期間は支那の勢力が西域に行はれし時期にして、貞觀二十二年以來、

于闐は四鎮の一として重視せらる、當時于闐は漢代の戎廬・扞彌・渠勒・皮山を併せ有し、兵士四千、人民勤勉にして佛教袞教俱に行はれたり。唐代に於て最も精細に于闐の事情を記述せしは玄奘なり、玄奘は西曆六百四十四年于闐に入り八ヶ月間在留觀察せし

所によれば、于闐の氣候和順にして穀物を産し、名玉織物を出し、人民の性質溫恭にして學藝を好み、士庶富樂の生活をなし、文學典章多く印度に則る、佛寺百餘、僧徒五千餘人、大多數は大乗家に屬せりとす、佛教僧侶のみを以て五千餘人ありとすれば之を供養せし于闐全國の人口は實際頗る多數に上りしことを想像すべく、其文化も亦見るべきものありとすれば、玄奘時代の于闐は正に西域に於ける文明の強國たりしが如し。高宗・玄宗の世、于闐は支那に與して吐蕃と争ひ、第八世紀に吐蕃がタリム流域に勢力を得るに及んで西域に於ける支那の權威次第に衰へ、徳宗の世、西曆七百九十年支那は殆んど西域の

保護權を失ふ、懿宗の世に至り吐蕃はタリム流域より退き西域の交通回復せるも、支那本部の政治漸く不統一となり西域を顧みるの邊なかりき。

#### 第四節 唐以後の于闐

五代に至り、晋の天福三年支那の使者于闐に至り、使者高居晦は當時の紀行を遺し、有益なる史料となり、この頃吐蕃は尙ほ南道附近に出入し居晦は吐蕃の往來するを見たり、宗教には佛教外道俱に行はれ國王は相當の權威を有し、國運隆盛なれども、唐代に比すれば幾分か國勢の降れるを感ぜしむ。

趙宋時代にありては、太祖の世、佛僧が于闐の使者に同行し或は正使となりて支那に來れるは、西方より回教徒が漸くタリム流域方面に勢力を及ぼせる影響として間接に支那の援助を受けんが爲なり。眞宗の世疏勒は回教徒の占領に歸して、佛教徒は于闐に遁れて之を拒ぐこと二十餘年、弓折れ矢盡きて遂

に滅され、于闐全國は回教徒の占領する所となり、  
以て今日に至れり。

### 第三編 和闐の古蹟

#### 第一節 干闐の首府

漢史は西城又は西山城を以て古代于闐の首府とな  
せり、而して西城の位置に就てはグルナル氏(Gre-  
enard)は今の和闐の西五哩に位するヨートカン(Yo-  
tkan)を以て之に當てたり、スタイン氏はヨートカ  
ンの北カルチュ(Khalche)より白玉河左岸まで約七  
哩、黒玉河まで四哩、黒玉河より綠玉河(Tang-i-Da-  
ria)まで一哩半なるを測定し、支那史に此距離を三  
十里、二十里、七里とするに比較して大差なさを論  
じ、今のヨートカンを以て西城なりと斷定したり。

#### 第二節 干闐の名刹

(一)『西域記』には于闐の名山を牛角山と號す西藏

所傳の牛頭山是なり、玄奘が示せる位置即ち王城西  
南二十里の地區を探究せし結果、スタイン氏はコー  
マーリー山(Kohmar)を以て之に當て、『法顯傳』の  
瞿摩帝寺(Gomati)は牛頭山下にあるが故に、其位  
置略ぼ一定せり、牛頭山麓に住せし瞿摩娑羅香(Go-  
masala-sardha)仙人の名に因み、之より變轉してコ  
マーリーの現名稱を生ぜしこと明なり。(二)『西域  
記』に王城の西五六里に娑摩若寺ありとし、『法顯傳』  
にも王城の西七八里に王新寺ありとす、スタイン氏  
はヨートカンの西一哩餘にソミヤ(Somiya)の地名  
を發見して今尙ほ聖窟の存するを知るに及んで娑摩  
若寺の古蹟なりと斷定したり。(三)スタイン氏は進  
んでヨートカンの西南二哩にある Bōwa-kambar 聖  
窟を以て玄奘の地迦婆縛那寺に當て、(四)ヨートカ  
ンの東南二十哩にあるアイディング湖(Aiding)を以  
て鼓池に當て、湖の側にある Nagharā-khānah の古  
址を以て鼓池寺の舊蹟なりと提示し、(五)ヨートカ

の東南一哩餘にある Kum-i-Shahidan を以て玄奘の麻射寺、西藏の Ma-tza 寺なりと推定せり、(六)迦濕彌羅の僧遍照が于闐に佛教を傳へしとき、國王が建立せし最初の佛寺たる贊摩寺の位置は『北史』に王城の南五十里とし、スタイン氏はヨートカンの東南々十三哩にあるチャルマ・カザーン (Chalma-Kaze) の古址を以て其舊蹟なりといひ、此地點に多くの唐代古錢を發掘して之を立證したり。解説者は別に『史學雜誌』五月號に於て「于闐考」と題する講演を掲げ、詳に于闐の歴史及古蹟を叙するを以て本誌の解説に於て重複すべき部分は意を用て抄略に従へり。

(未完)

(堀謙徳)